

Dear new students! Welcome to Chukyo University. Its our great pleasure that today we accept you as members of our university at this **matriculation ceremony**.

いま入学式のことをマトリキュレーション・セレモニーと申しました。耳慣れない言葉でしようが、マトリキュレーションとは「母体を持つ、原簿に登録される」という意味です。本日、皆さんは中京大学の学生・院生として原簿に登録され、学生証**matriculation card**を手にし、これまでに卒業した126,000名以上の方々と同窓の関係になるということです。改めて、晴れて中京大学生になられた皆さんを心から歓迎いたします。また、入学を祝うためおいで下さいましたご家族の皆さまにもお祝いを申し上げます。

皆さんがその一員となられた中京大学は1954年に開学し、63年の歴史を歩んできました。商学部だけの小さな一歩から始まり、今では文系・社会科学系の九学部、そして工学部、数々の名選手が輩出してきたスポーツ科学部を合わせて11の学部からなる総合大学に発展しました。学生数は約13,000人で、内、女子学生が38%と、キャンパスも華やいだ雰囲気彩られています。

私立大学には建学の精神がありますが、本学は《**学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ**》を掲げています。これにより何が目指されるのでしょうか。学術においては、学問に真摯に取り組むこと・人格を養うこと、スポーツにおいては、健康を大事にして、身技を磨き、スポーツマンシップを体得することです。学術とスポーツの調和のもとに創造的、躍動的な学びの殿堂を築くということです。お手元のプログラムに載っている学歌二番をご覧ください。「身技鍛えん若き血に 進取の鐘は響くかな いざ伝統の真剣味」との歌詞があります。身とこころ、そして技を磨き・鍛えることのうちに、何事にも果敢にチャレンジするという進取のスピリットが奏でられる、それが中京大学の伝統であるということです。そして「真剣味」とは、真すなわち真理の探究、剣すなわちスポーツを通じての心身の健やかな増進、味すなわち人間味・ヒューマニティの涵養を表しており、総合的人間教育が本学の教育の根幹であるということです。今年から全学共通科目に「中京大学を知る」という科目が開講されますので、そこで中京大学のことをもっと知ることができます。

教員は個別の研究や共同の研究を通じて研鑽に努め、レベルの高い研究に根ざして教育に当たり、皆さんを学問の世界に誘います。皆さんも主体的に学んでください。それに関し、ドイツの社会心理学者エーリッヒ・フロム名著「**To have or to be ?**」から、大学での学びに参考にしていただきたいことを話してみたいと思います。

フロムはこの書で、人間の生き方として、**have** 様式と **be** 様式の二つがあるとし、その違いについて例を挙げながら述べています。基本的に現代の生き方の特徴は物質主義のもとに「持つ」ことに傾いており、それは消費され消えていくものではないかとし、人間として内実を大切にす、外的要因で消えていくようなことのない、「ある」様式の生き方を求めねばならないのではないかとするものです。興味深いのは、大学での講義の受け方も例として取り上げられている点で、それを紹介します。

have 様式の受講はこういうものだと思います。即ち、きちんと出席し、教員の話すことを聞きながら、話されることや板書を可能な限り漏らさずノートに書き留めようとするタイプです。一見模範的な学習態度です。一方、**be** 様式の受講態度の学生は、メモを取るよりもじっと教員の話すことに耳を傾けています。時に頷いてみたり、首を傾けてみたりしています。どこが違うのでしょうか。**have** 様式の受講者の場合、聞いていること、書かれていることを記録することに注力するあまり、内容が自分とは結び付かず、知識の集積として「持っている」状態であり、試験の時に利用するものの、そのあとは消えていき、真には身に着かないようなものだということです。立派な講義の内容も、その学生においては“ないよう”な状態なのです。**be** 様式の学生は、白紙の状態ではなく、予めその日の講義の内容に備えて受講し、教員の話すことに反応しながら聞いており、よく中身が消化され、頭に残っていくということで、簡単には消えることのない「ある」状態だということです。どうでしょう。違いは歴然です。ぜひ参考にして受講してください。大学の講義はすべてシラバスという講義の趣旨・目標・内容を示したものが有りますので、前もって自分なりに備えをして臨み、聞きながら反応し、考えてください。そうすれば、講義を受ける前と受けた後では、自分が変化し、成長するのです。大学での学びはこうして主体的になされるものなのです。高校までと違い、教員の話すこと、テキストを通して覚え、知識を蓄えていくというのではなく、学び一問一答という「学問」あるいは「探求」するところです。そこに面白味があります。自ら探り、求めていくときワクワクしていきます。そういう体験を日々していく場です。ですから、**learn** から **study**、「学習」から「学

修」、すなわち、学び習うから、学び修得するへ転換させてください。

大学とは何ぞやという問いに、現代アメリカの碩学ヤロスラフ・ペリカンは、端的にこうまとめています。「大学は、研究によって知を進歩させ、教育において知を拡大し、出版によって知を普及させる。」と。最後の出版は文字通りの出版と共に、研究活動・教育活動の発信ともいえます。研究・それに根ざした教育・社会還元、教職員・学生が真摯に取り組むところということです。同時に、私は、常々大学の主人公は学生だと申しております。学生あつての大学です。学生が主体的に探究心をもって学べる場を築いてまいりたいと願っています。

いま、「知」ということが出てまいりましたが、知に対して謙虚であってください。知は無限です。ソクラテスは、“**I know one thing : that I know nothing.**”と言っています。また、先ほど申したことにつながりますが、知の獲得においても謙虚でなければなりません。安易になつてはなりません。今やスマートフォンによって、いわば百科事典・辞書を常に身近に持ち、簡単に知を取り出すことができます。それが自分のうちで消化されることなく簡単に張り付けられるようであつてはなりません。簡単に得たものは簡単に消えていくからです。さらに、知の活用についても謙虚でなければなりません。すなわち、知の悪用を避けなければなりません。自分自身を活かすことであるか、今生きているものだけでなくこの先の人間をも活かすことであるかを常によく吟味したいということです。

最後にひと言一なかなか皆さんと直接接することはできないかもしれませんが、常に皆さんと語り合いたいとの思いを持っています。可能な限り、学食で昼食をとっていますので、見かけたらぜひ声をかけてください。一緒に食べ、お話ししましょう。皆さんの大学生活が実り豊かなものになりますよう、心より願い、式辞といたします。

2017年4月1日